

【小松左京氏追悼エッセイ】「ただただ、残念です」

長山靖生

日本は今、一番指導を仰ぎたい人を失ってしまいました。

小松左京先生は日本SF界の牽引役であつたばかりでなく、二十世紀後半の日本を代表する知の巨人でした。今更、私ごときが言うことではありませんが、先生の知的好奇心はきわめて旺盛かつ柔軟で、文学はもちろん、先端科学から社会・政治、さらには落語や芸能界にまで幅広く、かつ深く及んでいました。SF大会などでお目にかかる時、話題があまりに豊富で、しかも冗談混じりであちこちにジャンプするので、戸惑うこともありました。しかしお別れした後で、会話の文脈を反芻してみると、話題転換の背景に先生の明晰な思考の軌跡が察せられ、その鋭さとスピードに驚嘆したものです。お忙しいなか、それでも若輩者にアドバイスをやろうと、あれこれ圧縮して話して下さいたのだと思います。さすがはコンピュータ付ブルドーザー。

古典SF研究会をはじめた時は、横田順彌先生の仲介を得て、名誉会長をお引き受け頂きました（たぶん、先生ご自身はお忘れになっていたと思います）。そして機関紙「未来趣味」を創刊する際には、さすがに原稿をお願いするほどの非常識さは湧かず、

それでもけっこう図々しいのでインタビュをお願ひしたら快く応じて下さいました。それを巻頭談話として掲載させて頂きました。

近年は車椅子での出御となり、「小松左京マガジン」最新号に載っていた写真ではすっかりお痩せになっていて、不安な気持ちになっておりました。また神戸文学館で開催されている小松左京展で、先生ご自身の講演も公開インタビューも予定されていないと知って胸騒ぎを覚えていました。しかしそれにしても、日本沈没のときにお亡くなりになるとは……。

石川喬司先生や筒井康隆先生によれば、東日本大震災、そして東電の福島第一原発放射能汚染事故といった惨事の後も、小松先生は「日本人は必ずこの困難を乗り越えるだろう」とおっしゃっていたそうです。しかし正直なところ、少なくとも今の私にはそのようなには思えません。小松先生と共に、日本の希望が失われてしまったような思いに捕らわれています。氣力が湧かないのです。「立ち直らなくては、立ち直らなくては」と思いながら、先生の本を読み返しています。